

# 鹿大ジャーナル

KADAI JOURNAL

<http://www.kagoshima-u.ac.jp/>



鹿大「知」の探検

**野外調査と歴史記録から自然史を解明する**

理学部 井村 隆介 准教授

鹿大の新たな試み

**鹿児島大学の新しい英語教育**

アラムナイ追跡隊 尚古集成館学芸員 寺尾 美保さん

輝く鹿大生 萩原 信太郎さん (医学部医学科5年)

鹿大見てある紀 農学部附属農場指宿植物試験場

鹿大への提言 (社)鹿児島県工業倶楽部会長 川崎 暢義氏

なんでも情報版「みみすく」

天璋院篤姫ゆかりの酵母による大学ブランド焼酎を開発  
ベトナムで国際シンポジウムを開催 ほか

特集

## 鹿児島大学と地域づくり

第4次垂水市総合計画策定における連携活動の例





道の駅たるみず「湯っ足り館」の足湯と桜島

特集

鹿児島大学は地域に根ざす総合大学として、南九州への地域貢献を活動の柱の一つに掲げている。そのなかで平成17年から総合計画策定を支援してきた、垂水市との連携が効果を表し始めてきた。垂水市の実例を通じて、鹿児島大学の地域連携のあり方を展望する。

平成19年11月に制定した大学憲章で、鹿児島大学は「地域とともに社会の発展に貢献する総合大学をめざす」と表明した。その中の社会貢献において、「南九州を中心とする地域の産業の振興・医療と福祉の充実・環境の保全、教育・文化の向上など、地域社会の発展と活性化に貢献する」としている。

国立大学法人化以降、鹿大と鹿児島県内の地方自治体との連携の動きは増え、平成18年に奄美市と、平成19年には鹿児島市と包括連携協定を締結し、幅広い分野で相互に連携・協力し、地域社会の発展に寄与することをめざしている。また徳之島町とはヘルシーブランド事業を効果的に推進する連携協定を平成19年に締結するなど、連携は地域全体に及ぶものから、個別事業に関するものまで多様である。ここでは鹿大の地域連携の具体例として、垂水市との3年以上にわたる取り組みを紹介したい。

# 鹿児島大学と地域づくり

第4次垂水市総合計画策定における連携活動の例



平成19年9月17日実施の公開講座「基本計画編II～高齢者福祉～」の様子（講師：徳田修司教育学部教授）





「第1回垂水を語りもんそ会」の様子。「自分たちの地域は自分たちで守ろう」をテーマに市民200名が参加し、活発な意見交換が行われた。第1部では、理学部の井村隆介准教授が「台風14号から見てきたこと」、鹿大生涯学習教育センター長の原口泉教授が「災害にも負けない先人の知恵」と題し講演を行った。第2部では、鹿大の教員と垂水市の振興会長連絡協議会会長、自主防災組織会長が参加し、パネルディスカッションが行われた

鹿兒島大学 ▲ 桜島  
垂水市

錦江湾と桜島を目の前に望む自然豊かな垂水市は、人口が約18,400人、面積が約162.01平方キロメートル。市面積の約2割は鹿大農学部附属高隈演習林が占める。「水清く 優しさわき出る温泉の町 垂水」をまちの将来像に掲げてまちづくりを進めており、平成20年10月には市制施行50周年を迎える。

## 垂水市のまちづくりを 考える公開講座

鹿大と垂水市の連携のきっかけは、平成17年にさかのぼる。当時、鹿兒島大学生涯学習教育研究センターが新しい生涯教育のあり方として、大学が地域に入り込み、地域のニーズに応える公開講座ができないかと考えていた。一方、垂水市は平成16年に合併協議会を離脱し、合併に頼らないまちづくりを模索していた。生涯学習教育研究センターと垂水市が出会い、意気投合したのが平成17年のことである。それ以来、同センターの小栗有子准教授を中心とした鹿大の教員が講師となり、「今後の垂水市のまちづくり」をテーマに公開講座を行ってきた。

## ”ESD” まちづくりのキーワード

平成17年から18年にかけては、公開講座「垂水市の将来改革と基本構想」を実施した。一連の講座で、垂水市のまちづくりのキーワードとしてESDが取りあげられた。

ESDは、「持続可能な開発のための教育(Education for Sustainable Development)」を意味する略語。市民や未来の子どもたちが安心して暮らせる社会を実現するため、垂水市が抱えている課題を自ら克服し、

「持続可能な」新しい社会システムを具体化・機能させる手法や考え方を学び、育むことを指す。垂水市がESDを取り入れ、持続可能な発展を進めていくためのまちづくり・ひとづくりを目指す必要性が、この公開講座を通して確認された。

その後も「第1回垂水を語りもんそ会」(平成17年12月)、公開講座「地域防災マップをつくろう」(平成18年7月～9月)、公開講座「地域で自然学校をつくろう」(平成18年12月～翌年2月)を開催。鹿大の教員が講師となって、まちづくり・ひとづくりをテーマに議論してきた。

## 総合計画策定のための 協定を締結

こうした取り組みの成果を市の総合計画に生かそうと、垂水市は「市民と市職員の手作り」を総合計画づくりの方針の一つに定め、平成18年10月、鹿大と「第4次垂水市総合計画策定に関する協定」を締結した。総合計画とは、今後10年間のまちづくりや市政運営の方向性を示した計画で、地方自治法第2条第4項に基づき策定が義務づけられている。国立大学法人が地域の総合計画策定に関わるというこのユニークな取り組みは、当時さまざまな媒体で紹介されるなど注目が集まった。



公開講座「垂水市の将来改革と基本構想」の様子。小栗有子准教授が講師となり、「地域資源の再発見」をテーマに意見が交わされた



公開講座「地域で自然学校をつくろう」での炭焼き体験の様子。垂水市立大野小・中学校の跡地を拠点にした「大野ESD自然学校」では、平成18年から鹿大と垂水市、大野地区が連携し、環境教育・森林教育を実施している

## 公開講座の進め方



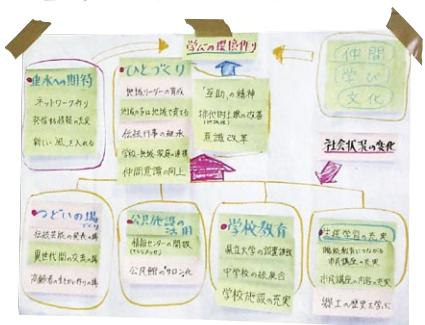
3 発表／まとまった意見や方向性を他グループと共有する



1 講師による問題提起／鹿大の教員が垂水市の現状やデータを提示。受講生が市の課題を考えていきかけをつくる



4 講評／講師がまとめを行う



2 小グループでのディスカッション／グループディスカッションで出された意見を付箋紙などを使ってまとめる

## 総合計画の3層構造

### 基本構想

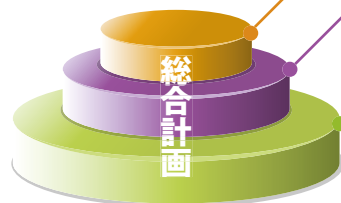
まちづくりや市政運営を進めるための基本的な方向性や考え方。公開講座を活用して原案を作成

### 基本計画

基本構想を実現させるための政策レベルの計画。策定した基本構想に基づき、市職員が作成

### 実施計画

基本計画で示した政策を達成するための事業レベルの計画。未着手のため、これから本格的に作成



## 市民・市職員参加の総合計画づくり

総合計画は基本構想、基本計画、実施計画の三要素で構成されており、約10年を計画期間としている。

今回の総合計画づくりは「みんなで作ろう総合計画」をキャッチフレーズに、市民と市職員が中心となって、総合計画の中の基本構想と基本計画の方向性を考えていくこととなった。具体的には公開講座を活用して意見を積み上げ、そこからまちづくりの核となるキーワードや考え方を抽出し、総合計画に盛り込むという方法がとられた。鹿大と垂水市が基本構想・基本計画を構成する項目を洗い出し、それに沿って鹿大が公開講座のカリキュラムを組んだ。講師はテーマごとに法文学部、教育学部、理学部、工学部、農学部、水産学部の教員などが担当した。

## 市民向けと市職員向けの公開講座を開催

公開講座は平成19年3月から1年間にわたり、「基本構想編」を5回、「基本計画編」を12回、「基本構想策定編」1回、「総計活用編」2回を実施し、のべ835人の市民・市職員が参加した。

「基本構想編」では、地方自治や垂水市の現状分析、暮らしの満足度チ

ェックを行い、総合計画の核となる基本構想策定のためのキーワードをまとめた。「基本計画編」では「よい仕事環境づくり」「よい居住環境・自然」「よい学び・仲間・文化」「よい行政と住民参加」という四つの分

科会に分かれ、それぞれが「林業・水産業・農業」、「防災・都市計画・環境保全」、「地域コミュニティ、高齢者福祉・学校教育」、「地方自治(行政)・男女共同参画・地方自治(住民参加)」について垂水市のもつ可能性や課題を整理した。「基本構想策定編」では、「基本構想編」の成果を基に市職員が作成した基本構想の素案を受講生がチェックし、分かりにくい表現や追加してほしい点を挙げていった。「総計活用編」では完成した総合計画を次はどう活用するかを確認した。

市民向け公開講座と並行して、市職員のスキルアップを目的とした市職員向け公開講座も実施。総合計画策定に必要な知識や能力を高めるカリキュラムが組まれ、垂水市の現状を知るための調査の進め方や統計の活用方法などを学んだ。

## ワークショップ形式の公開講座

市民向け公開講座のほとんどは、原則、ワークショップ形式で進めら



垂水市役所 の声



企画課計画調整係主査  
堀留 豊さん(写真右)  
企画課地域政策係主査  
葛迫 洋さん(写真左)

前回の第3次垂水市総合計画では、その策定業務をコンサルタント会社に依頼していました。今回の第4次垂水市総合計画は市職員と市民が協力してすべてを手作りでやるということで、鹿大の知恵をお借りすることになりました。私たちがここまでやれたのは、鹿大の先生方の頑張りがあつてこそと思っています。

公開講座を通してワークショップ特有の意見の引き出し方、時間の使い方などといった合意形成のプロセスを学ぶことができ、それを総合計画づくりという市民との実践の場で生かせることはとても貴重な経験でした。総合計画という大きな目標に腰がひけてしまった講座生もいたようなので、もっと生活に身近なテーマを設定して講座生を飽きさせない工夫も必要だと感じました。

今後は、総合計画のどの部分を自分たちが担っているのかということ各課で認識し、総合計画を100%活用していきたいと思えます。行政も変わりつつあります。市民の方々にも自分が垂水市のまちづくりでできることは何なのか、という意識を共有してほしい。平成20年度の公開講座などを通して、そういう市民の方々のお手伝いをしていきたいと考えています。鹿大とは、これからも垂水市を舞台にさまざまな分野の先生方と連携して新しいビジネスモデルなどが生まれるような取り組みができればいいですね。

公開講座受講生 の声



垂水市立図書館 勤務  
丸山 恵子さん

昭和56年以来、垂水に住んでおり、平成2年からは垂水市立図書館で司書として働いています。「第1回垂水を語いもんそ会」に参加したとき、総合計画を手づくりする公開講座が開催されるということを知りました。

図書館で働いていると市民の方々からいろいろなことを質問されます。一市民として感じていることもたくさんありましたので、総合計画づくりの過程で普段感じていることを垂水市に伝えられたらと思い、参加を決めました。

総合計画なんて難しそう、と思っていたのですが、「総合計画というのは垂水市民が幸せになるために、あなたたちが10年先のことを考えてつくるんですよ」と鹿大の先生方に教えていただきました。慣れない議論をするのは大変でしたが、意見を出し合い、ほかの講座生の方の考えを知ることができたことは新鮮な体験でした。

自分たちでつくった総合計画だからこそ、それがどれくらい達成されているのか、自分たちにはできることは何なのかを考えていくことが大切だと思っています。これからは、本の紹介や読み聞かせの会などといった仕事を通して、若いお母さんたちの子育て支援ができないか考えていきます。今年度実施される公開講座にもぜひ参加したいですね。

れた。市民の意見を引き出し、活発で建設的な議論ができるよう、進行役や書記を務める市職員は事前に市職員向けの公開講座でワークショップの手法を学んだ。

公開講座ではまず、講師による問題提起の後、数人のグループに分かれてディスカッションを行う。出された意見は付箋などを活用してまとめ、参加者の意見が一目で理解できるような工夫がなされた。意見交換の後、書記がディスカッションの結果を発表し、参加者全体での情報共有を行う。最後に講師の講評により、まとめあげるプロセスをとった。小栗准教授は「公開講座で重視したのは、いかにして市民と市職員との対話の場をつくるかということ。その方法としてワークショップは有効でした。利害関係や価値観が異なる中、地域で一つの方向を目指そうとするなら、議論は避けて通れません。意見を出して終わりではなく、対話を通して一つの方向性を引き出す方法を学んでほしかった」と言う。

議論の成果をまとめた  
提言書を提出

次の行動につなげる「ひとづくり」の役割も果たしたといえる。

公開講座で得られたまちづくりの方向性は提言書にまとめられ平成19年8月、受講生の代表が市長に提出した。その後、提言書や公開講座の報告書を参考に市職員が基本構想の素案を作成し、素案は市長の諮問機関「垂水市総合開発審議会」(会長 神田嘉延教育学部教授)が検討を行った。同審議会は、大学教員という専門的な立場からの意見を求める垂水市の要望で設置され、鹿大の教員6名、市民4名で構成されている。この審議会の答申を基に修正が行われ、基本構想案は平成20年3月、市議会で議決された。

基本計画も公開講座の結果を基に市職員が素案をつくり、その素案に対して市民からの意見「パブリックコメント」を募集。その内容を反映させ、6月に決定した。

今回の総合計画づくりでは、実施計画の作成を残すものの、市民と行政(市職員)の役割分担と信頼関係の構築の大切さや、9つの校区を地域づくりの拠点にすることなど、「市民と市職員の手作り」によるまちづくりの指針を見出すことができた。

## 公開講座「地元学と地域づくり」の様子(会場 大野ESD自然学校、6月3日・4日開催)

6月3日

### 講義

「地元学」について、講師の吉本氏による講義があった。20名の受講生に加え、鹿大の教員も参加。「地元学」の手法を使って大野地区のことを調べ、発見した地域の資産をどう活用するかを考えるという課題が与えられた



### 調査

受講生がそれぞれのテーマに分かれて調査を開始。榎園雅司さん(左)と篠原彰治さん(右)は「元気がでる裏山(山菜園)」をテーマに、内田一己さん宅を訪問して話を聞いた



### 絵地図作成

各受講生がテーマごとに調査した写真や情報をまとめた大野地区の絵地図を作成。作業は午後9時半まで続いた。写真は受講生・迫田和文さんの作業風景。テーマは「共同する大野の祭りと行事～大野の暮らしの楽しみ～」



6月4日

### 発表会

前日の調査で驚いたこと、気づいたことなどについて、2分程度にまとめて発表した。写真は受講生・前田康晴さんの発表風景。テーマは「三人の女性達の作るおいしさを届けます～大野に今あるものに気持ちを添えて～」



### まとめ

生涯学習教育研究センターの小栗有子准教授によるまとめ



各受講生が調査して得た情報を、大野地区でどう活用できるかのアイデアをまとめた

## 総合計画づくりから 実際のまちづくりへ

次は、総合計画を実行段階に移し、実際の垂水市のまちづくりにつなげていくことが課題となる。そのため、平成20年度は公開講座の性格を、「大学主導」から「地元主導」へと変化させた。

その一つが、公民館長などの地域リーダーや市職員向けのゼミナール形式公開講座だ。公開講座「総合計画と行政改革」では、市役所内の各課がそれぞれが抱えている課題について、文献の読解、地域の調査を行いながら情報を共有。総合計画で学んだワークショップの手法も活用しながら、市職員が学習課題や学習計画を立て、大学側がそれをサポートする。公開講座「地元学と地域づくり」では、垂水市内でも地域によって課題が異なることに注目し、市内の9つの校区ごとに校区の現状を把握し、校区内の市民が自ら課題解決を目指す。具体的には、「地元学」の提唱者、吉本哲郎氏(2010年)の思想と手法を体験し、地元主導のまちづくりの進め方を学ぶ。公開講座「垂水のまちづくり」とESDゼミナール」では、道の駅や猿ヶ城溪谷、大野ESD自然学校、漁協といった既存の観光拠点や施設をどう組み合わせ、垂水市のまちづくりのために何

ができるかを考える。

市民を対象とした自由提案型公開講座も開講する。9つの校区単位で地域の現状を踏まえて学びたいテーマを決定し、それに応じて鹿大と垂水市が講師の紹介や学びの場の提供を行うというもので、市民の主体性を尊重した内容が特徴だ。

## 市民・市職員の主体性を 育む公開講座

どの公開講座も、市役所内や校区内といったより具体的な現場で身近な課題について考えていけるよう、具体的なテーマの設定が可能となっている。平成20年度の公開講座は、総合計画づくりをきっかけにESDの手法を学んだ市民や市職員が中心となり、自らの力で対話型学習ができる態勢が整ったといえるだろう。「まちづくりの現場において責任を負うのは彼ら自身。彼らはどうしたいか、そのために大学をどう使うかというふうを考えて、公開講座を通して主体性を高めてほしい。ESDを基盤としながら、鹿大としても市民や市職員の方々が本気になるような講座へ進化させていきたい」と小栗准教授。

鹿大と垂水市との二人三脚による垂水市のまちづくり・ひとづくりは、まだ始まったばかりだ。



## 鹿大と地域自治体との連携協定締結状況

鹿大と協定を結んでいる他の地域自治体との連携内容を紹介します。

### 【奄美市との包括連携協定】

鹿大と地域自治体との連携協定締結第一号は、平成18年3月に旧名瀬市（現在の奄美市）と結んだ包括連携協定。協定では、教育・文化、産業、環境、医療・保健・福祉、まちづくりなどの分野で連携・協力し、相互発展に寄与することとしている。

### 【鹿児島市との包括連携協定】

鹿大は、鹿児島市のまちづくりにおいて大学の知的資源や多面的な機能などを活用し、幅広い分野で相互に協力連携することにより地域社会の発展に寄与することを目的として、平成19年11月30日、鹿児島市との包括連携協定を締結した。今後は、鹿児島市のまちづくりにおける政策課題等に関する調査・研究、まちづくりを支える人材の育成や活用、市との共催によるイベント等の開催や市民に開かれた大学としての環境づくりなどにおける連携協力を推進していく予定となっている。

### 【徳之島町との連携協定】

平成19年11月19日、鹿大は徳之島町と連携協定を締結した。徳之島町が地場産品発掘・ブランド化プロジェクトの一環として計画している「ヘルシーブランド事業」を効果的に推進し、地域社会の活性化や人材育成へ寄与することを目的としている。



鹿児島市との協定締結式



記者会見の様子

## 鹿大が地域に及ぼす経済効果 ～生産誘発効果867億円、雇用創出数7975人～

平成20年3月11日、鹿大は記者会見を開き、「鹿児島大学の地域社会に及ぼす経済効果分析調査」の結果を発表した。

2006年度に鹿大が鹿児島県に与えた経済効果は生産誘発効果が867億円、雇用創出数が7975人。この分析調査は、本学が鹿児島県地域経済研究所に依頼し、同研究所が2005年度のデータを使用して、産業連関分析によって実施したもの。鹿大が「安定的かつ持続的に鹿児島県に経済効果をもたらしている」ことが明らかとなった。

## 鹿大の地域連携事業

鹿児島大学には地域と連携して行われている事業がある。代表的なものは、鹿大と鹿児島県、鹿児島県酒造組合が連携し、平成19年度から本格開講した寄附講座「焼酎学講座」が挙げられる。地元産業界・自治体との連携によって、鹿大が地域の伝統的な産業を担う人材を育成する地域の「ひとづくり」を担う好例と言える。

平成18年に開講した「かごしまルネッサンスアカデミー」は鹿児島県や民間企業と協働で、鹿児島県の食品産業や関連する業界、ひいては鹿児島県全体の活性化を目指した新しい人材育成プログラムである。

平成16年には大学院人文科学研究科が旧名瀬市（現在の奄美市）の強い要望を受け、「奄美サテライト教室」を開講した。同教室で開講される講義は大学院の正規の授業として単位認定される。平成19年度からは徳之島町で「奄美サテライト教室徳之島分室」による授業も始まっている。



かごしまルネッサンスアカデミーの講義風景

## 鹿大が進める新しい 地域貢献のあり方

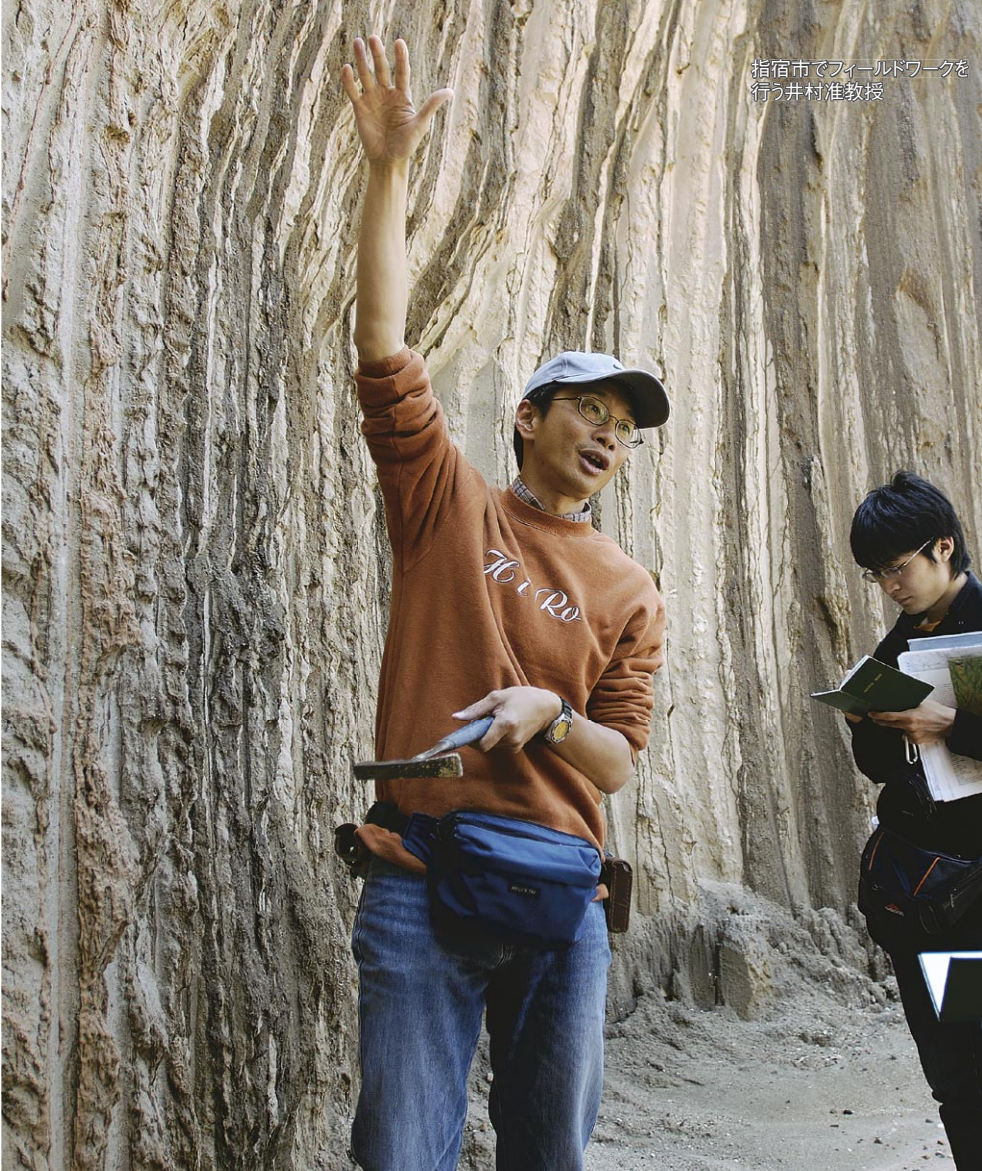
垂水市との取り組みは、鹿大のさまざまな学部の教員が、垂水市に向いて課題やニーズを掘り下げ、地域とともに解決策を考えるという、公開講座の新形式であるとともに、まちづくり・ひとづくりを目的とする地域貢献の実践モデルである。地方自治の重要性が増すなか、大学が地域社会と連携し、地域のまちづくり・ひとづくりを支援するという貢献は、今後ますます社会からの要請が増えていくと考えられる。

鹿大は自治体だけでなく、地域と連携して「焼酎学講座」「かごしまルネッサンスアカデミー」など、独自の人材育成プログラムを作り上げてきた。8学部10大学院研究科を擁する総合大学としての知見とマインドを活用すれば、さらなる地域貢献は十分可能である。そのためには、地域の実情に合わせて大学の総合力を発揮するためのプロジェクトと、それを動かすコーディネイト力が不可欠。鹿大は本年度、大学憲章に基づき、「地域社会の発展と活性化のための社会貢献プロジェクト」を立ち上げた。今後の取り組みに、期待とともに真価が問われる段階に来ている。



# 野外調査と歴史記録から 自然史を解明する

南九州の自然史を研究する理学部地球環境科学科の井村隆介准教授。野外調査や室内実験だけでなく、史料なども活用して研究を行っている。その傍ら、防災や地震・火山をテーマとした講演会、自然観察会などに講師として積極的に参加し、自然科学や防災に関する知識を一般の人々にも伝えている。



## 理学部地球環境科学科 准教授 井村 隆介

いむら・りゅうすけ／昭和39年大阪府生まれ。昭和62年鹿児島大学理学部地学科卒業。平成元年同大学院理学研究科地学専攻修了。鹿大時代は霧島山の噴火史を研究。平成5年3月東京都立大学(現・首都大学東京)大学院理学研究科博士課程地理学専攻修了。通産省地質調査所(現・産業技術総合研究所)特別研究員として阪神大震災時、全国の活断層の調査を担当。「兵庫県南部地震の緊急研究および兵庫県南部の沖積地盤・山麓斜面に関する斜面災害等調査」により平成7年度地質調査所所長賞を受賞。平成8年4月鹿児島大学講師に就任。平成11年2月より現職。専門は第四紀地質学、火山地質学、地震地質学。国土交通省九州地方整備局の道路防災ドクター、農林水産省九州農政局の特殊土壌検討委員会委員、九州地区総合防災・環境ネットワーク委員、鹿児島県土砂災害対策アドバイザー、霧島市ジオパークアドバイザー。

### 井

村隆介准教授の専門は第四紀地質学である。「第四紀」は46億年に及ぶ地球史の中の「現代」に相当し、約200万年前から現在も続く時代を指す。井村准教授は地形や地層を調べ、南九州の自然環境の変遷、「自然史」の解明を目指している。「普段見ている風景を科学的裏づけを持って説明したい」と言う井村准教授の書棚には専門外の書物も数多く並ぶ。「自然現象は、しばしば災害を引き起こします。

自然史の解明は知的好奇心を満たすだけでなく、防災の観点からも重要。そのため、一般の人に自然史を理解してもらう活動も欠かせません」と井村准教授。そして「自然史解明のためには、野外調査や分析機器による研究だけでなく、歴史記録の研究も重要です」と語る。

### 野外調査と史料分析で 災害を検証

井村准教授が歴史記録の研究を行うのは、自然現象を地球科学的な手法だけで再現するのに限界があるからだ。「地層の重なり方で現象の発生順序は分かるが、それがどのくらい続き、いつ収まったかは分からない。歴史記録はそれを補ってくれます」と井村准教授は言う。

地球科学的な手法で得られた成

\*1 長門本

山口県下関市の赤間神宮に伝わる『平家物語』の異本。専門家の間では改変が多く、内容の正確性に疑問があるとされてきた。





研究室の学生とフィールドワークを行う井村准教授。「どんな手法を使えば目の前の壁を超えていけるか、自分で考えられる学生になってほしい」



垂水市で行われた公開講座「防災マップをつくろう」の様子。井村准教授は住民とともに現地を歩き、実際に役立つ防災マップづくりを指導した

「平家物語」から読み解く  
霧島山噴火

平成19年11月、井村准教授は『平家物語』の異本『長門本』に記述されている霧島山の噴火が、定説とされてきた945年の噴火ではなく、1235年の噴火である可能性が高いことを国際会議で発表した。長門本には、霧島山噴火の様子

「噴火を実際に目撃した人物か、その人から情報がもらえるような人物でなければ、これほど正確な表現はできない。長門本が書かれたのは、霧島山の溶岩流出があった直後と考えました」と井村准教授は言う。

長門本の噴火記事は、『日本噴火志』などの資料を根拠に、長年、945年の噴火を指すとされてきた。しかし、日本噴火志の年代根拠とされた薩摩藩の学者が編纂した本『襲山考』に年代を示す記述はなく、945年の噴火とする根拠は何もないことが分かった。

一方、有史以降に霧島山で起こった溶岩流を伴う噴火は、地質調査から複数確かめられている。噴火の記述内容や時代背景から、長門本の記事は1235年の御鉢噴火を記述したものと判断でき、長門本成立はそれ以降の数十年の間と考えられる。さらに、長門本がこの時期に成立するためには原本の平家物語はこの頃以前に成立していたと結論づけた。井村准教授が独学で到達したこの結論は長門本研究者の最新の研究成果とも矛盾がなく、日本を代表する古典文学の成立時期に制約条件を与えることから、平家物語研究者の注目を集めている。

果に先人が残した情報を加えると、過去の現象を人間の時間・空間スケールで復元でき、将来起こるかもしれない災害の規模や頻度などを考えることができる。過去の自然現象を定量的に復元して初めて、自然史の研究は防災に貢献できるのだ。「野外調査と史料分析のバランスが大事です」と井村准教授は強調する。

高いことを国際会議で発表した。長門本には、霧島山噴火の様子

「大山震動して、岩崩れ、猛火もえ上がりて、ことに煙うずまきて、暫ばかりして、まわり一、二丈そのたけ十余丈ばかりある大蛇の、角はかれ木の如くおほひかかり、まなこは日月の如く輝きて、大にかる様にて出来給ふ」

この文章を火山学的に解釈すると、「地震とともに噴火して、すぐに火砕流が発生した。そして、しばらくしてから溶岩が流れ出た」となる。この内容は、地層の重なりから推定される噴火の推移と一致する上、噴火開始から溶岩流出までの間に「す

ぐ」でも「1日後」でもない「しばらく」の時間があつたことを教えてくれる。「噴火を実際に目撃した人物か、その人から情報がもらえるような人物でなければ、これほど正確な表現はできない。長門本が書かれたのは、霧島山の溶岩流出があった直後と考えました」と井村准教授は言う。

長門本の噴火記事は、『日本噴火志』などの資料を根拠に、長年、945年の噴火を指すとされてきた。しかし、日本噴火志の年代根拠とされた薩摩藩の学者が編纂した本『襲山考』に年代を示す記述はなく、945年の噴火とする根拠は何もないことが分かった。

防災・自然科学の  
インタープリターとして

井村准教授は、地質調査所勤務時代の阪神大震災に関する調査や、鹿児島県内の災害現場の調査を通じて、研究成果を分かりやすく伝えることの重要性を痛感したと言う。そのため、講演会や自然観察会の講師を積極的に引き受け、自然科学を分かりやすく伝える「インタープリター」であろうと努めてきた。「専門知識を持つ人間が『自分の命は自分で守れ』と言うのは簡単ですが、研究者はその成果を一般の人に役立つ知識として伝える努力をしてきたか、と自問自答しました。防災に限らず自然科学のインタープリターであることは私の使命だと思っています」と井村准教授は言う。

今後は、災害が予想される地域で過去の災害履歴を明らかにする研究を行いたいと考えている。過去数十年間のデータで明日の天気を予測すると同じで、過去一万年分の災害データがあれば、これから百年単位の災害予測ができる。「防災の研究は人々の財産、生命が守られて初めて完結する。住民目線に立った啓発活動を行いながら、科学的裏付けも地道にやっていきたいと考えています」

\*2 インタープリター

自然体験・観察などを通して、自然現象やその背後にある意味や関係性を読み解き、人々に分かりやすく伝えることができる人のこと。





インテンシブ英語アカデミッククラス、ライティング&プレゼンテーションの様子(ロバート・ファウザー准教授)

鹿大の新たな試み

Challenges of  
Kagoshima University

## 鹿児島大学の新しい英語教育

～少人数制・習熟度別クラスなどを取り入れた英語教育改革～

平成20年度から鹿大の英語教育が新しく生まれ変わった。1年生向けの選択必修科目を三科目とし、少人数制・習熟度別クラスを採用。学習到達度や弱点分野を把握できるテスト“G-TELP”や、大学院生向けの科目も新たに導入し、学部生から大学院生までをカバーする英語教育を目指している。

鹿児島大学の英語教育は、これまで習熟度別授業もほとんどなく、一クラス平均60人以上の多人数クラスが進められてきた。しかし、「大学全入時代」と、近年の入試形態の多様化が重なり、学生の英語能力のレベルが多様化。学生のレベルに合わせて効率的な授業が必要になってきている。さらに、卒業生アンケートによって「学生時代にもっと英語力をつけたかった」という学生のニーズが明らかになったこともあり、鹿児島大学教育センター・外国語教育推進部を中心に英語教育の改革を検討してきた。外国語教育推進部長を務める富岡龍明教授は「専門分野を学ぶ上で、学生には基礎的な英語能力が不可欠。学生の英語能力を向上させることは大学の使命である、という考えのもと、学部生から大学院生までをカバーする大規模な改革を始めました」と説明する。

### 習熟度別・少人数制で あらゆるレベルの学生に対応

平成20年度から始まった新しい英語教育では、従来の「コア英語」「インテンシブ英語」に加え、「英語特別演習」を開設。平成20年度入学の1年生は、この三つの選択必修科目から一つを選び、受講するこ

とになった。

コア英語には三段階のレベルに分かれた習熟度別クラスを導入。特にライティング(英作文)とオーラル(英会話)の講義は教員と学生のやりとりを重視した双方向型の講義のため、1クラス30人程度の少人数制を採っている。平成18年度から開講のインテンシブ英語(20人クラス)は、1年生から大学院生までを対象にした中・上級レベルの徹底少人数クラス、平成20年度開講の英語特別演習(30人クラス)は基礎力を徹底的に鍛え直すことを目的としたクラスで、どちらも少人数制を採用し、センター試験の結果や学生の希望を考慮したクラス編成となっている。

学期末の評価などによっては、コア英語からインテンシブ英語や英語特別演習へのクラス替え、コア英語の習熟度別クラス間での移動が可能だ。また、レベル別、科目別の推奨テキストを導入し、講義の質・レベルの保証を目指している。コア英語、インテンシブ英語、英語特別演習を受講するすべての学生は、学期末に学習到達度判定テストG-TELP<sup>\*1</sup>(国際英検)を受検しなければならない。学期末の評価は、定期テストの結果に加え、G-TELPの成績も判断材料と

\*1 G-TELP (General Tests of English Language Proficiency)

米国の言語学者、ロバート・ラド博士を中心とするチームにより開発された、英語を母語としない人たちのための英語能力評価テスト。現在、韓国、中国、日本、台湾、アルゼンチン、メキシコの6カ国で実施され、留学資格、英語教育ツールとして幅広く利用されている。



鹿児島大学の新しい英語教育

対象	科目名	定員	特徴
学部 1年生	●コア英語	—	鹿大英語カリキュラムの中核科目。各学部ごとに3段階の習熟度別クラスを設置。
	コア英語C(ライティング=英作文)	30人	教員と学生のやりとりを重視した少人数クラス。
	コア英語U(総合)	50人~60人	
	コア英語O(オーラル=英会話)	30人	教員と学生のやりとりを重視した少人数クラス。
	コア英語R(リーディング=読解)	50人~60人	
	●インテンシブ英語	20人以下	英語に自信があり、さらに実力を伸ばしたい人のための科目。少人数制。希望者の中からセンター試験等の結果を踏まえ選抜する。
	インテンシブ英語 IA インテンシブ英語 IIA インテンシブ英語 IB インテンシブ英語 IIB		会話・リスニング中心の内容。 英語資格試験・文法・構文中心の内容。 会話・リスニング中心の内容。 英語資格試験・文法・構文中心の内容。
学部 2年生	●英語特別演習	30人	徹底的に英語基礎力を鍛え直すための基礎英語クラス。センター試験の結果を考慮した受講条件がある。
	●英語オープン	—	文学や時事など特定の分野をテーマとした目的別英語。教室での学習にこだわらないe-learning授業やレベル別英会話を新設。
大学院生	●インテンシブ英語アカデミッククラス	—	大学院生の英語能力向上を目的とした科目。
	アカデミックライティング&プレゼンテーションA,B(上級)		論文執筆、プレゼンに必要な能力を身につける上級者向けクラス。
	アカデミックライティングA,B(中級)		英語論文を書くための基礎構文力を鍛える中級者向けクラス。
	アカデミックリーディングA,B(中・上級)		本格的な英語論文読解力をつける中・上級者向けクラス。



2月19日に開催された全学の学生・教職員によるワークショップ「鹿大の英語教育を考える!~やる気の出る要因となくす要因~」。全体討論会では、教員による評価のほらつき改善、受講科目の選択肢増加を求める声などがあがった



インテンシブ英語アカデミッククラス・ライティングAの様子(岡岡龍明教授)

される。全学規模でG-T E L Pを学習到達判定テストとして利用し、それを評価に組み入れるのは、全国の国立大学法人で初の試みだ。G-T E L Pは「一夜漬け」の勉強では点が取れないため、真の実力を判定でき、学生の自学自習を促す効果が期待できる。また文法や読解、リスニングといった分野ごとの弱点診断が可能で、教育指導の面からもふさわしい。

**大学院生の英語能力を高める科目も整備**

学部1年生以外の英語教育も充実しつつある。

2年生の前期には「英語オープン」という科目を設け、1年生で身につけた英語能力の積み上げを指し、応用力を鍛えることができるといった。学部によっては英語オープンを必修にしているところもある。英語オープンは文学や時事などといった特定の分野をテーマとした目的別英語で、個々の学生の興味関心に合わせて受講できる。教室での学習にこだわらないe-learning授業やレベル別英会話もそのメニューの一つだ。

大学院生の英語能力を高める科目「インテンシブ英語アカデミッククラス」も開設された。日本人学

生は英語を中学校から大学まで学習しているにもかかわらず、苦手意識をもつ学生が多い。大学院生の必須事項である英語論文の読解、英語での論文作成、口頭でのプレゼンテーションに支障をきたすケースもある。こうしたことから大学院生向けの英語科目のニーズは高いと判断し、ライティングやプレゼンテーション、リーディングに特化した内容となっている。

**国際社会で活躍しうる人材を養成するために**

平成20年度は学部1年生を対象とした改革が中心だった。今後は就職・研究面で英語能力が特に必要とされる3、4年生のカリキュラムを充実させていくことが課題となる。それが実現すれば、鹿大の英語教育の「系統性・段階性・継続性」は、より強固なものになるだろう。

教育センター長の谷口溪山大学院医歯学総合研究科教授はこう強調する。「今回の英語教育改革は、鹿児島大学憲章の中の『国際社会で活躍しうる人材を育成する』という精神に一致している。さらに充実した内容を目指し、教育センターとして英語能力の必要性を各学部にアピールし、全学で取り組んでいきたいと考えています」



博物館自体が  
歴史そのもの。

そんな環境で  
仕事ができる  
幸せです。

背景の御殿は、仙巖園内にある  
19代島津光久の別邸。光久以  
降も代々の藩主に受け継がれ、  
29代忠義が鹿児島に住んだ12  
年間は本邸として使用された。現  
在、明治17(1884)年の改築さ  
れた部屋を中心に、当時の約3分  
の1が残されている

アラムナイ追跡隊

interview  
**Miho  
TERAO**



尚古集成館学芸員

**寺尾美保さん**

● profile

1966年鹿児島市生まれ。鹿児島県立中央高等学校卒業。88年3月鹿児島大学法文学部人文学科卒業後、(株)島津興業入社。尚古集成館の学芸員となり現在に至る。2003年からは鹿児島純心女子短期大学の非常勤講師を、2006年からは鹿児島市立清水中学校学校評議員を、2008年は南日本新聞客員論説委員を兼務する。NHK大河ドラマ特別展「天璋院篤姫展」企画委員。著書「天璋院篤姫」(高城書房、2007年)が第34回南日本出版文化賞を受賞。その他の著書に「みんなの篤姫」(南方新社、2008年)、共著に「天璋院篤姫のすべて」(新人物往來社、2007年)、「明治維新の新視角」(高城書房、2001年)などがある。

※「アラムナイ」とは英語で同窓生のこと。各界で活躍する鹿児島大学の卒業生や留学生などのユニークな活動を紹介します。





寺尾さんの近著。どちらも手に入る史料を丹念に読み込み、史実のみで構成した

## 学芸員になって以来の特別な年

2007年は、私が学芸員になってから初めて経験した特別な年でした。2008年のNHK大河ドラマに「篤姫」が決まり、篤姫をテーマとした仕事に集中して取り組んだ一年だったからです。NHK大河ドラマ特別展「天璋院篤姫展」では、企画委員として全国各地の学芸員と協力して展示をつくりあげていくという貴重な経験ができました。天璋院篤姫展は、全国の会場を巡回させていくスケールの大きい展覧会。大規模な展示を手がけるのは学芸員の憧れですから、うれしかったですね。

篤姫に関する本二冊を執筆する機会にも恵まれました。先例となる本がない時期の出版だったのでプレッシャーはありましたが、手を挙げてもらえなかったら、やりがいもありました。研究テーマは「幕末維新史」です。幕末から明治にかけて、つまり島津家が大名から華族となる時代を研究しています。篤姫もこの時代の人物。最近では、篤姫関係の仕事のほか、歴史に興味のない方や子供たちにどうしたら歴史に興味をもってもらえるかを考え

る仕事もやっています。研究だけでなく、「普及」も学芸員の大事な仕事の一つです。

## 史料批判の精神を鍛えられた鹿大時代

子どものころは絵や工作より、「調べもの」が好きでした。小学生のころから漠然と「大学生になりたい」と思っていたので、進学に迷いはありませんでした。

鹿大では国語学を専攻していました。勉強したというより、勉強の仕方を教わった4年間だったと思っています。衝撃だったのが、先生方から「辞書を引いてはいけない」と言われたこと。「辞書は現代の人がつくったもの。辞書を鵜呑みにせず筆者が根拠にしている史料にまで遡り、自分で確認しなさい」という意味です。玉石混淆を見分ける目を徹底して鍛えられたことは、今の仕事の原点になっています。史料批判は歴史研究の基本ですから。

私たちが卒業するころはバブル景気で、選り好みしなければ就職口はありました。でも、私は迷っていました。文章を書く仕事に憧れていたけれど、マスコミに就職しようとは考えませんでした。<sup>\*1</sup>卒業後しばらくして尚古集成館で働くことになり、結果的に、執筆

や調べものといった、自分が好きなことを仕事にすることができました。日本史関係の人脈はなく、男性ばかりの世界で学芸員としてやっていけるのか、自分の研究領域をどうやってつくっていくかなど不安に感じていた時期もありましたが、入社後の割と早い時期からいろいろな仕事を任せていただき、学芸員の基礎を一から教わりました。2000年の明治維新史学会で初めて全国の研究者を前に研究成果を発表したとき、やっと学芸員らしくなれたかな、という気持ちでした。去年、篤姫と出会い、さまざまな仕事をさせていただいたおかげで、明治維新という転換期を生きた人々について、もっと研究してみたいという気持ちになりました。

尚古集成館は立地や建物そのものに歴史があり、近くに島津家の



大学3年生のころ、鹿大の国際交流会館で留学生たちと(右から3番目)

方がおられ、史料があるという素晴らしい環境。そういう場所で仕事ができ、とても幸せです。



篤姫について学びながら鹿児島島の魅力を再発見する「篤姫子ども塾」で講師を務めた

## 学生時代は大いに迷って悩んでいた時期

学生時代から将来のビジョンが明快な人もいれば、そうでない人もいます。それでも、肩肘張らずに楽しく大学生活を過ごしていれば、何かひっかかることはあると思う。大学にいと学部にかかわらず、いろいろな世界に触れることができます。特に鹿大のような総合大学であれば、あらゆる分野の先生と知り合う機会があるし、そんな先生方と話をするだけでも楽しく、世界が広がるもの。始めから目標を絞り込みすぎず、すぐに結果を求めようとせず、気になったことは何でもやってみたらいいのではないのでしょうか。学生時代は大いに迷っていい時期。立ち止まって、悩んだり考えたりする時間を大切にしながら、毎日を過ごしてください。

\*1 尚古集成館 1923(大正12)年に開館した島津家の歴史博物館。本館は1865(慶応元)年に建てられた旧集成館の機械工場の建物で、鹿児島県最古の石造建造物。昭和34年敷地が国の史跡に、昭和37年には建物が重要文化財の指定を受けた。





鹿大医学部の基礎を築いた英国人医師、ウィリアム・ウィリスのレリーフとともに、鶴陵会館にて

サーカスは一つのきっかけ。  
ここから新しい鹿児島  
の医療現場を  
創造していきたい。



vol. ⑥  
Shintaro Hagihara

## 萩原信太郎さん

医学部医学科5年  
[鹿児島県出身]



オーストラリア・タスマニアの小学校での萩原さん(写真中央)。約4カ月間、ボランティアとして日本語教師を経験した

3月29日、闘病中の子どもたちやその家族を招待し、桜ヶ丘キャンパス内の鶴陵会館でクラウン集団「プレジャーB」のサーカスが行われた。サーカス前日には、プレジャーBのリーダー、大棟耕介さんを講師に、医療コミュニケーション研修会も開催された。ホスピタル・クラウンとして



も活動する大棟さんから、医療従事者たちがプロのクラウンのコミュニケーションスキルを学んだ。

このサーカスと研修会の実行委員長を務めたのが、萩原信太郎さん。医学部・歯学部生から成る130人の実行委員と共に、企画を成功に導いた。「こどもたちに、大きな会場で笑いと感動を味わってほしかった。研修会も同時に行うことで、鹿児島の医療現場が新しいものを取り入れ、活性化すれば、との思いもありました」

鹿大への入学前、関西の大学で自然科学を専攻した萩原さん。在学中1年以上に渡り、海外を旅した経験をもつ。「オーストラリアの無医村で数カ月間、週一回診療に来る医者の手伝いをする機会がありました。医療の大切さはもちろんですが、医者は言葉や文化、人種の壁を超えた『命』というレベルで人々と通じ合えるのだと実感し、医者になりたいと思いました」

いったんは就職したものの、身内の交通事故によって再び医者への道を考え始めた。医者である姉の勤務先を見学し、気持ちが固まった。地元・鹿児島で働きたいと鹿大へ入学。今は臨床研修の真っ最中だ。「一流の医者になるためには、勉強以外に必要なものが必ずある。今回のサーカスでその種をもらった気がします」

私の座右の銘

### ナナイロコトバ

「明確に想像し、信じて、実践したものは創造される」

「感動の億万長者30のルール(平野秀典・著)」からの引用。皆、さまざまな可能性を秘めている。それを花開かせてほしい。

明確に想像し、  
信じて、実践した  
ものは創造される  
萩原信太郎



3月29日に行われた「プレジャーBのコメディアン・クラウン・サーカス」。企画からサーカス団を招く資金の調達まで、すべて学生たちで行った

#### \*2 ホスピタル・クラウン

遊園地やイベント会場で活躍するクラウンが、ボランティアとして病院で行う活動。長期療養中の子どもたちに芸を見せたり、遊び相手になったりする。

#### \*1 クラウン

サーカスの人気者「道化師」のこと。





大温室では約150種類のヤシを保存。全国のヤシの8割は指宿産といわれ、その普及には試験場が大きく貢献した



パッションフラワー（観賞用）

## 熱帯・亜熱帯植物の研究保存拠点

鹿児島市街地から南へ約50キロメートル離れた指宿市。温泉地として名高く、年平均気温18℃という温暖なこの町に、鹿児島大学農学部附属農場指宿植物試験場があります。試験場の前身は、大正7年に設置された鹿児島高等農林学校附属農場指宿植物試験場。3・9ヘクタールの広さをもつ試験場には22本もの泉源があり、その温泉熱を利用して温室などを加温しています。この温泉熱と温暖な気候を生かし、熱帯・亜熱帯性の作物を利用した教育・研究、地域貢献を進めてきました。

現在、試験場では熱帯・亜熱帯性作物の導入と保存・利用、熱帯産イモ類の生理生態学研究、マンゴー、スターフルーツ、ライチ、グアバ、パッションフルーツなどに代表される熱帯・亜熱帯性果樹類の栽培技術などに関する研究を進めています。JICAやNGOからの依頼で、国内外の技術研修生を受け入れ、技術研修なども行っています。

教育面での活用も盛んです。農学部の学生が受講する実習では、熱帯植物の繁殖や栽培方法、観賞植物の鉢物生産、農作業機械の運転操作、施設の管理などを学びます。また、学部学生や大学院生の研究の場としても利用されています。平成19年度からは



農学部附属農場指宿植物試験場  
〒891-0402 鹿児島県指宿市十町1291  
TEL 0993-22-2848 FAX 0993-22-2970  
※一般公開は月曜～金曜の8:30～17:15

将来は、他地域にない植物遺伝資源を活用した熱帯・亜熱帯植物の研究保存拠点として、新品種の開発や植物がもつ抗菌作用などの機能性の研究、医療・環境などさまざまな分野への貢献を目指しています。

共通教育科目「農・食・命・環境フィールドワーク」が開講し、全学の学生が試験場で植物の繁殖方法などを学ぶことができるようになりました。あまり見る機会のない珍しい熱帯・亜熱帯性の作物を扱えることが、試験場で学ぶ最大の魅力です。



パイプ中を温泉水が流れ、施設内を温める



鹿児島県内で生産されている特産の完熟マンゴーは鹿大が昭和40年代から本格的に試験栽培を始め、普及に貢献した





## ▶ ベトナムで国際シンポジウムを開催

2月29日、ベトナム共和国ハノイにおいてベトナム社会科学院と「ベトナムの経済発展と日本の経営」をテーマに合同シンポジウムを開催しました。

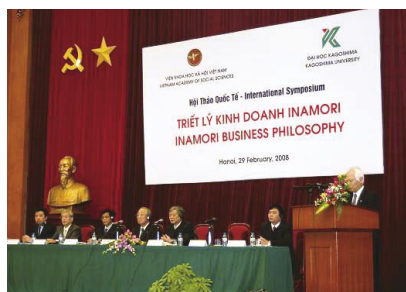


シンポジウムで挨拶する吉田学長

昨年5月に本学と国際学術交流協定を締結したベトナム社会科学院は、ベトナム政府のシンクタンクとしての機能を有する国立の研究機関。稲盛和夫京セラ(株)名誉会長(本学工学部出身)の基調講演の後、社会科学院のドー・ホワイ・ナム院長と本学卒業生のファム・フー・ロイ氏、本学稲盛経営技術アカデミー奥健一郎教授らによるプレゼンテーションが行われました。

会場には、本学やベトナム社会科学院の研究員のほか、現地の学生、ベトナム政府や経済界、日系企業の幹部および日本大使館職員など約450名が訪れ、熱心に聴講しました。

またシンポジウムに先立ち、28日には吉田学長を始めとする



本学関係者とベトナム社会科学院との今後の交流や事業計画についての協議が行われました。

## ▶ 天璋院篤姫ゆかりの酵母による 大学ブランド焼酎を開発

NHK大河ドラマ「篤姫」の主人公 天璋院篤姫ゆかりの地、今和泉島津家別邸跡(現 指宿市立今和泉小学校)から採取した土から、農学部焼酎学講座実習棟「北辰蔵」において培養、分離して得られた酵母を「篤姫酵母」と命名し、2月に商標出願しました。

「篤姫酵母」を使用した本格いも焼酎の商品第1号は、鹿児島大学ブランド焼酎として焼酎学講座大学院農学研究科1年の大山修一氏が経営する会社から販売。篤姫の思いが天翔ける風となってふるさとの宙(そら)に語りかける様をイメージして「篤姫酵母仕込『天翔宙』(てんしょうちゅう)」と命名されました。

鹿児島大学では、今後この酵母を希望の焼酎メーカーに無償で提供し、商品に「篤姫酵母」または「姫酵母」を使用許諾し、大学ブランド焼酎にすることとしています。大学ブランド焼酎は『きばいやるせ』『春秋謳歌』と『天翔宙』の3種類となりました。



酵母を採取した農学部高峯准教授(右)と大山氏



篤姫酵母仕込『天翔宙』

## ▶ 馬場教授(医歯学総合研究科)がC型肝炎の治療薬開発に着手

大学院医歯学総合研究科の馬場昌範教授の研究が、平成20年度独立行政法人科学技術振興機構(JST)の「地域イノベーション創出総合支援事業『重点地域研究開発推進プログラム』」に採択されました。この制度は大学等の研究成果の中で、数年以内に企業化が見込まれる課題を募集し支援するもので、馬場教授の研究課題「C型肝炎に対する治療薬の研究開発」の新規性・優位性、企業化に向けた実施計画の妥当性が評価され、JSTから3年で7800万円の委託研究費が支給されます。

C型肝炎ウイルス(HCV)には有効なワクチンがなく、現在使用されているインターフェロンが高価なことなどから、新しい治療

薬の開発が強く望まれています。馬場教授はBVDV\*を用いて、薬剤の抗ウイルス効果を効率よくスクリーニングする方法を確立。共同研究機関の東京大学、共同研究企業のオンコリスバイオファーマ(株)と連携し、安価で有効性の高い新規抗HCV薬の実用化を目指します。将来、開発に成功すれば、本学発のC型肝炎治療薬が世界に向けて、供給されることになります。

\*BVDV HCVと同じフラビウイルス科に属し、遺伝子構造が類似している。HCVと異なり、培養細胞でよく増殖し、かつヒトには感染しないため、抗フラビウイルス薬のスクリーニングに用いられることがある。



## ▶ 学長と学部卒業予定者との懇談会を開催



3月13日、学長と各学部の卒業予定者16名との懇談会を開催しました。

この懇談会は、今年の3月に卒業を予定している学生と学長をはじめとした役員との懇談の場を通して、卒業生から学生生活についての感想や大学への要望等を聞き、それらを今後の大学運営に活かすことを目的として開催したものです。

学生からは、実習時間の充実や研究環境の改善といった要望のほか、「大学祭を大学開放イベントとして位置付けてはどうか」や「地域社会とのコミュニティスペースを増やすなどして、市民のアクセスを円滑にする環境作りが必要ではないか」といった大学の活性化に対する提言がありました。

## ▶ 「再利用できる木質素材なのに陶器のような茶碗」の開発に成功

農学部の松尾友明教授と理工学研究科の門川淳一教授の研究グループが、(株)森林資源利用促進研究所と連携して新素材「ニュー・ウッド・マテリアル」を開発し、それを成型品にすることに成功しました。これは森林産業の副産物である木粉・竹粉に、渋柿の渋み成分(カキタンニン)とタンパク質を接着剤として活用することで、強度・撥水性が高く、かつ使用後に燃料や肥料として利用することができるようになるものです。

成型品は木の風合いを残しながら、陶器のような肌触りを持ち合わせ、環境にやさしい製品として、従来のプラスチック容器やトレー代わりの使用が期待されます。来年3月末の市場投入を目標に、量産化を目指した研究開発を継続、第1号商品としてはカップ麺容器や家電ボードなどが計画されています。「地域のさまざまな未利用副産物の活用を促進するための『未利用生物資源教育研究センター』設立の構想もしたい」と松尾教授は語っています。



報道関係者に新素材を説明する松尾教授(左端)



新素材「ニュー・ウッド・マテリアル」の成型品(写真上)とその原料(写真下)

## ▶ 人文社会科学研究科が下関市立大学と学術交流協定を締結



握手を交わす木部暢子研究科長と下関市立大学の坂本紘二学長

大学院人文社会科学研究科は、広域連携によって地域活性化に寄与する研究の推進や人材を育成することを目的として、下関市立大学大学院経済学研究科との学術交流協定を3月13日に締結しました。

今後、相互の地域における農水産物のブランド化戦略をテーマに、それぞれの現状や課題の比較研究および3年後をめどに食品ブランド理論の体系化を目指すほか、本学人文社会科学研究科が展開している「島嶼学」研究プロジェクトに下関市立大学の研究者が参加することとしています。また、下関市立大学で実施している海外でのフィールド調査に本学の大学院生が参加するとともに、鹿児島県奄美市・徳之島町に鹿児島大学が設置しているサテライト教室で下関市立大学の大学院生が学ぶなど学生同士の交流や、インターネットや出版物による研究成果の公開や共同シンポジウムの開催なども予定されています。



## ▶ 学術情報基盤センターと三島村が、無線LAN伝送距離の日本記録を樹立



三島村竹島に設置した無線LAN/パラボラアンテナ

鹿児島県三島村にブロードバンド通信環境を整備する研究を進めている同村と本学学術情報基盤センターは、2月20日、三島村竹島と指宿市山川町の間の47.5kmを無線LANで結ぶ伝送実験に成功しました。

センターでは総務省戦略的情報通信研究開発推進制度（SCOPE）の支援を受けて三島村と連携、同村役場竹島出張所と指宿市立山川小学校に無線LANを設置して実験を行った結果、3分間の伝送に成功しました。これは無線LANの伝送距離としては国内最長で、免許不要の市販製品による伝送実験に成功したことで、低コストでのブロードバンド化を実現できる可能性が示されました。

今後センターでは、天候・潮汐・船舶往来などの通信への影響評価を行い、海上長距離無線LAN伝送による竹島へのブロードバンドの導入に向けて検証する予定です。

## ▶ 桜ヶ丘キャンパスに「さくらっ子保育園」がオープン



職員の乳幼児の保育を行う施設、鹿児島大学さくらっ子保育園が6月1日、桜ヶ丘キャンパスに開園しました。鹿児島大学で働く職員の子どもで0歳から小学校入学までの乳幼児を対象とした施設で、定員は30名。月曜日～土曜日は7:00～19:00（21:00まで延長可）、水曜日は24時間保育とすることで、仕事と子育ての両立のサポートにつながるものと期待されています。

## ▶ 市民ボランティアによる「花壇づくり」がスタート

農学部では、地域の方々と大学との交流を目的に、学内の一角に花壇づくりと管理をお願いするボランティアを募集し、応募のあった市民約30名による花苗の植え付けを3月6日に行いました。

参加した市民ボランティアの方は、教職員や学生ボランティアとともに、農学部の約50平方メートルの敷地に、用意したパンジー1281株とコニファー苗10本を植え付けました。

活動期間は1年間。その間、花壇の草取りや水やりなどを定期的に行いながら、農学部観賞園芸学研究室の坂田祐介教授らにより土づくりから花の育て方などについて指導を受けることになっています。



## ▶ 入試成績優秀者にスタートダッシュ奨学金を授与

5月22日、平成20年度に入学した学生のうち、入学試験において優秀な成績を修めた学部生35名及び大学院生10名に対し、スタートダッシュ学資金授与式が行われました。

授与式では、奨学生に決定通知書が吉田学長から授与され、奨学生を代表して教育学部の岩崎陵さんが「奨学生として勉学やスポーツに一層励み、充実した学生生活とな

るよう努力します」と決意を述べました。

本学資金は、勉学意欲の向上や優秀な人材の輩出を図ることを目的に昨年度から授与しているもので、学部生については、大学入試センター試験の結果が学部又は学科（課程）の上位である者、大学院生については、各研究科が実施する入学試験の結果が上位である者が対象となっています。





## 鹿大の明日を耕すために

(社)鹿児島県工業倶楽部会長 川崎 暢義氏

工業倶楽部と鹿大は包括連携協定を結び、地域貢献を目指し、日々活動してきました。鹿大とともに活動をしてきた立場から、鹿大の明日を耕すための提言をしたいと思います。

### ■ 留学生の就職支援と鹿大生のボランティア活動

提言の一つめは、留学生と県内企業との就職マッチングです。鹿大と工業倶楽部、県が協力して、県内企業への就職を希望する留学生を応援しようというものです。成功すれば、グローバルなビジネスを目指す企業の戦力となりますし、企業の活躍は県にとってもプラスになるでしょう。

二つめは、学生のボランティア活動の単位化です。県内の限界集落などでのボランティア活動を通じて、農村・農業の活性化を進めるのを狙いにしてほしいと思います。鹿大生が汗を流して学んだことを地域の高校生に伝え、高校生は中学生に、中学生は小学生に伝えるという有機的な連携にまで結びつけ、「平成の郷中教育」ともいえる鹿児島独特の教育を実現できればと考えています。

### ■ 鹿児島大学憲章の意義

平成19年11月に鹿児島大学憲章が公表され、学長が一層リーダーシップを発揮する体制ができたと思いますし、現に発揮しております。憲章に沿った年度計画がつけられているとは思いますが、

今後はそれを具体的な数値目標やスケジュールにまで落とし込んだアクションプランをつくり、学内だけでなく、学外の誰が見ても分かるような形で公表してほしい。鹿大はもっと露出するべき。定期的にプレス発表を設定してタイムリーな話題を提供し、社会の視線を鹿大に集める努力も必要だと思います。

### ■ これからの鹿大に必要なもの

これからの鹿大には、もっと学際的な「オンリーワンテーマ」をもってほしい。特に海に囲まれた大学という地理的条件にふさわしいテーマがいいですね。今後、こうしたテーマを柱に鹿大がチャレンジを続けていけば、鹿大はもっと有名になれるし、鹿児島県の第二次産業の振興にもつながる。鹿児島独自の第二次産業が根を下ろすことで、鹿大生がもっと地元に着し、県全体が活性化することを期待しています。

かわさき・のぶよし/昭和8年生。昭和34年東京大学経済学部卒業後、八幡製鐵に入社。その後、森ビル勤務を経て、昭和56年日本有機株式会社に入社。昭和57年から現職。社団法人鹿児島県工業倶楽部会長、鹿児島大学戦略的研究企画推進委員会委員も務める。

## ▶ 神田教授(教育学部)がベトナムに日本語学校を設立

平成19年10月、神田嘉延教育学部教授が協力者とともに私財を投じ、ベトナム共和国の農村中核都市ナムディンに「ナムディン日本語文化学院」を設立しました。同学院は、日系企業への就職や日本への留学を目指すベトナム人を対象とした日本語学校です。

現在、日本人4名とベトナム人2名、合わせて6名のスタッフが、40名の学生を教えています。在学期間の2年間で日本語検定2級取得が目標。日本語教育を中心に、日本の社会や文化について学ぶ科目や、音楽・絵画などの情操

教育も取り入れたカリキュラムが特徴です。

将来は技術者対象や看護師対象のコースを設ける予定。

神田教授は「ナムディン日本語文化学院を基盤に、ベトナムでの大学建設へつなげていきたい」と話しています。



ベトナム人学生に教える神田教授とナムディン日本語文化学院の外観





鹿児島地溝内に存在する4つのカルデラ (宇宙開発事業団の原図に加筆)

# 鹿児島湾の成り立ち

鹿児島大学総合研究博物館長 大木 公彦 教授

大隅半島と薩摩半島に挟まれた細長い鹿児島湾は、湾内に活火山がそびえ、水深が200メートルを超える海盆を持つ世界的に見ても珍しい湾です。一方で、大隅・薩摩の両半島は恐竜時代の深海に堆積した地層が隆起し、山を形成して海岸に迫り、25キロメートルほど隔てた両半島に沿う海岸線は平行です。温泉ボーリングのおかげで陸域の地下の様子や、水産学部の敬天丸(現在はありません)に積まれたスパーカーという探査機器によって鹿児島湾の海底の地下構造が明らかになりました。その結果、鹿児島湾は東西に引っ張られ、陥没してできたことがわかってきました。アフリカの大地溝帯のように割れて開いているからこそ、鹿児島湾は深く、マグマが上昇してくる場所だったのです。この陥没地形は「鹿児島地溝」と呼ばれています。

京原人の出現より約10万年ほど前の、今から70万年前に開き始めたようです。「鹿児島地溝」の中にマグマが上昇してくるため、地溝に沿って、北から加久藤、始良、阿多、鬼界の4つのカルデラが並び、霧島、桜島、開聞岳、硫黄島、諏訪之瀬島などの活火山がこの地溝やその延長上にあります。「鹿児島地溝」に沿って火山活動が繰り返され、海域が広がったり縮小したりしながら、今のように美しい鹿児島湾が形づくられたのです。鹿児島市の北東部にある寺山公園に立つと、眼下に始良カルデラに相当する湾奥部が広がり、活火山の桜島、北へ目を転じると霧島の山々が連なる絶景を見ることが出来ます。「鹿児島地溝」の中に噴火し陸域になった指宿市は温泉の宝庫です。数十万年にわたる地球の営みが、素晴らしい自然と資源を鹿児島にもたらしました。

「鹿児島地溝」は、昔の海に堆積した地層の分布から、北

## お知らせ

### 保護者向け広報紙『鹿大だより』を創刊しました

学部生の保護者に向けて鹿児島大学の現状を伝える広報紙、『鹿大だより』を創刊、3月に保護者に送付するとともに、入学式で配布いたしました。『鹿大だより』は今後も定期的に発行、本学の取組みを保護者の皆さまにお伝えしていきます。



(表紙イラスト)

●鹿大と垂水市の地域づくり  
鹿大と垂水市が連携して行っている、垂水市のまちづくり、ひとづくり。平成17年から始まったこの取り組みは、市民と市職員による総合計画策定へとつながった。鹿大の知見や人材を生かした垂水市の地域づくりは、鹿大の地域貢献のあり方を示すモデルとなり得るだろう。

広報誌等編集専門部会部会長  
守田 和夫

「地域とともに社会の発展に貢献する(大学憲章)」ために、開かれた大学として広報機能を充実し、様々な角度から情報発信することに力を注いでいきます。皆様のご意見をお待ちしております。

## 編集後記

本学は、8学部、10研究科、学生数約1万2千人の総合大学。地域社会との連携を深め、国際的な学術交流を進める、まさに「研究と教育の南の知」の拠点と呼ぶに相応しい大学です。本号では地域社会との連携に注目し、本学の文化、学術、技術など「知」の豊富な人材が、垂水市の地域づくりに連携している活動を取り上げました。また、最近話題の篤姫の研究を以前から続けてきた卒業生や、篤姫ゆかりの酵母による大学ブランド焼酎の開発、地域の防災活動にも取り組む研究者を取り上げ、地域との連携を紹介しています。

